第 95 回 日本感染症学会学術講演会
第 69 回 日本化学療法学会総会 合同学会

テーマ

小児の抗菌薬における課題と小児専門病院における抗菌薬適正使用の実践と評価 ～ Global-PPS ～

開催期間 2021 年 5 月 7 日 (金) ～ 9 日 (日)

オンデマンド配信期間：2021 年 5 月 17 日 (月) 9:00 ～ 6 月 18 日 (金) 17:00

開催形式 WEB 配信

本セミナーのご視聴には学術講演会への参加登録が必要です。
参加登録方法につきましては、学術講演会の WEB サイトをご確認ください。

スポンサードセミナー 27

司会 **具 芳明** 先生 | 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科　統合臨床感染症学分野　教授

演題 1 **本邦における小児の抗菌薬使用状況と対策上の課題について**

演者 1 **宮入 烈** 先生 | 国立成育医療研究センター　感染症科診療部長　感染制御部統括部長

演題 2 **小児専門病院における抗菌薬適正使用の実践と評価、その現状と課題**

「見える化」から「見せる化」へ ～ go a step beyond ～

演者 2 **笠井 正志** 先生 | 兵庫県立こども病院　感染症内科　部長

共　催
第 95 回 日本感染症学会学術講演会
第 69 回 日本化学療法学会総会 合同学会
ビオメリュー・ジャパン株式会社

BIOMÉRIEUX

演者 1

宮入 烈 先生

国立成育医療研究センター
感染症科診療部長　感染制御部統括部長

演題 1

本邦における小児の抗菌薬使用状況と対策上の課題について

発表抄録

2015 年の薬剤耐性菌対策アクションプラン制定から約 5 年が経過した。各種データベースを用いた検討によると抗菌薬処方には確実な減少傾向が認められる。特に小児領域において減少幅は大きく、プライマリーケアから病院における小児科医の地道な努力と創意工夫によるものと評価される。しかしながら、内訳をみると処方内容の改善には個人レベルの介入が必要である事、子どもを診療する小児科以外の診療科の協力が必要である事が示唆される。また 2020 年における処方量減少は、新型コロナウイルス感染症対策による他の市中感染症の減少を反映している可能性が高く、必ずしも処方行動が変化した結果とは言えない。更に、主要なアウトカム指標である薬剤耐性菌の減少に対する効果を見るには至っていない。今後を見据えた場合、病原体診断を含む特異的な対策が必要である。

演者 2

笠井 正志 先生

兵庫県立こども病院　感染症内科　部長

演題 2

小児専門病院における抗菌薬適正使用の実践と評価、その現状と課題

「見える化」から「見せる化」へ ～ go a step beyond ～

発表抄録

小児専門病院には AMR（Antimicrobial Resistance）に対して脆弱な易感染患者が多いうえに、広域抗菌薬を必要とする重症感染症患者が密に混在している。そのため、小児専門病院では ASP（Antimicrobial Stewardship Program）をチーム（ASP team ; AST）活動として、院内における抗菌薬使用量の把握と公表（「見える化」）、広域抗菌薬使用患者や血培陽性患者のラウンドなどし、医療の質の改善をしてきたという実績がある。
次のステップとして求められるのは、病院経営への貢献アピールである。その際にポイントになってくるのが、「見せ方（見せる化）」である。さらには同業他施設や世界標準と「比較」を見せ、自施設の「立ち位置」を知らせることが改革へのファーストステップとなる。
また小児における抗菌薬使用の約 9 割は外来でなされている。院内だけではなく、地域レベルにおいても小児専門病院の AST は ASP 活動を積極的に推進する必要性がある。
これら小児専門病院における AST 活動の実践と課題について講演する。

お問い合わせ先
ビオメリュー・ジャパン株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂二丁目 17 番 7 号赤坂溜池タワー 2 階
営業部　Tel：03 - 6731 - 9000
www.biomerieux.co.jp

BIOMÉRIEUX

2F531-1　21031901